

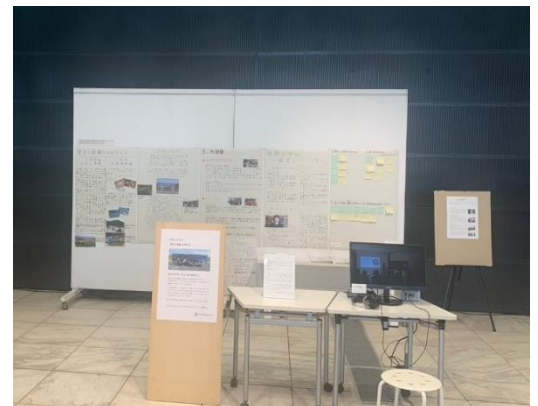
社会科の授業を対人援助学の視点から⑥

2024 年 5 月 15 日 内田一樹

1. 2 年目の終わりに

3 月から 4 月に宮城県仙台市にあるせんだいメディアテークの 3 がつ 11 にちをわすれないためにセンター(通称、わすれン!)の企画展「星空と路」に、「東北と復興」を考える」として出展をさせてもらった。これは今年度スタディツアーに参加した生徒が、ツアー後もわすれン!の担当者の方達とやりとりを続けていて決まったことだった。(詳細は、<https://recorder311.smt.jp/information/66310/>)

3 月 10 日にはやりとりを続けていた生徒が企画展を出している他の記録者たちと一緒にギャラリートークに登壇した。



「震災と被災地を記録してきた 3 人が語り合う 仙台市

せんだいメディアテークでは、震災や被災地をさまざまな形で記録してきた 3 人の展示が開かれている。この日は 3 人が集まり、それぞれの記録について話し合った。

震災前から仙台市の風景写真を撮り続けてきた建築士の高橋親夫さん(76)は、2011 年 2 月の同市荒浜などの写真を、当時の日記とともに展示。雪が積もった浜辺の流木や消波ブロックなど震災前の日常を切り取った。「変化していく世界を誰かが記録しないと、何も残らない」

自閉症の息子(当時 10)と仙台市で被災し、避難所に行けなかった主婦の橋本武美さんは昨年、障がい児の親 7 人を取材し、震災での苦労を聞いた。「(支援を求めたいと)言いづらい、申し訳ないって思わなくていい世の中になってほしい」といった音声記録やその文字おこしを展示している。「他の地域で災害が起きた時に自分だったらどうするか、考えるきっかけにしてほしい」

埼玉県の自由の森学園高校の佐野友紀さん(18)は、校外授業で訪れた石巻市での住民インタビューを模造紙にまとめた。「自分が教えてもらうだけでなく、記録として他の人に返すことが重要だと思う」と話した。」一朝日新聞 DIGITAL「【東日本大震災 13 年】「風化させない」 能登の被災地にも祈

り」2024年2024年3月10日12時27分（2024年3月11日21時16分更新）より一部抜粋
(<https://www.asahi.com/articles/ASS3B2RFYS38UTIL01L.html>)

今回3月9日から11日まで2泊3日で仙台、石巻ツアーを組んで、会場には同僚数名と一緒に訪れた。ギャラリートークを通して感じていたのは、「普通の風景」とは？「復興」とは？といった根源的な問いの存在であった。同時に「関東の」高校生が考えていることに対して、東北ではない地域から自分達がどのように眼差されているのかについて知ることができたというような言葉もあった。東日本大震災についての記録のイベントで、東北以外の地域に住んでいる高校生がこうして登壇することはこれまでなかったそうだ。そこに東日本大震災のことを考えているのは自分達（仙台市、宮城県、東北）だけではないのか、他の地域の人たちは東北についてどのように思っているのか、という一抹の不安にも似たような思いを感じ取った。そこに東日本大震災を東北のものとして忘却していかようにしているような今の社会があるように思わせてしまっているのではないかと感じた。一方で、関東の高校生がこうして学んで、自らの学びを記録として残したり発信したりすることに対して、希望を感じているということも他の登壇者たちからの言葉から感じられた。

その後、石巻市に移動し初めて3月11日という日を石巻市で迎えた。広く市民向けの追悼のイベントにも参加をした。黒い喪服を着た遺族の方達をたくさん目にして、改めて石巻市を襲った災害の大きさを感ぜずにはいられなかった。普段訪れている日と違うからこそ、町の様子も全然違ったし、当たり前ではあるけれど探訪者である私と当事者の方たちとの間の「隔たり」を久しぶりに感じた。黒い喪服に身を包んでおられる方々や感情に震えている方々を目にして、少し遠い位置にいる自分を久しぶりに認識する。だからこそ「つながり」をつくっていくことが大切で、これからも「つながり」続けることが大事なのだと感じた。午後に訪れた雄勝ローズファクトリーガーデンで代表である徳水博志さんがおっしゃられていた人と人との「つながり」をつくる場としてのローズファクトリーガーデン。選択講座「東北と復興」もまた埼玉と宮城、東北の人たちと関東の高校生の「つながり」をつくる場としてもあるのではないかと。自分達の活動を進めていくためのエネルギーを得たように思う2泊3日だった。

2.3 年目に向けて

対人援助か社会構造か。対人援助学か対人援助スキルか。高校生達の授業を通して行うべき方向は、と悩みながらの3年目がスタートする。

昨年度の講座は2年目ということもあり、社会構造を考えたり議論したりということが多かった。「対人援助」として何かを行ったわけではない。様々な方々の話を聞く、傾聴することはあったが、これも発信をしたいという現地の方の声を受け止めるということが主であったように感じる。

しかし、2年目が終わってみて感じていることは、高校生が来て、話を聞いてくれること、考えてくれることに言葉にすることは難しいが「希望」のようなものを感じてくれている人たちは多いようだった。これは教員が意図して作りだしているわけではなく、生徒達が自主的に質問をしたり、全体のプログラム以外の部分のちょっとした隙間時間で話したりする中で感じてもらっている様子だった。現地で移動支援をされている、特定非営利活動法人移動支援 Rera さんは2年連続で講演をしてくださったが、毎年喜んで快諾して下さり、多くのメンバーを連れて参加をしてくださっている。3月の

メディアテークでの企画展「星空と路」では、展示会場でスタッフの一人の方に声をかけられ、関東の高校生たちが一生懸命学んで考えてくれていることを嬉しく思う、という趣旨の言葉をいただいた。

学ばせてもらっている、受け入れて貰っているのは「東北と復興」の講座の方であるにもかかわらず、この講座で高校生達が学んでいる、考えてくれることを嬉しいと感じて貰っていることは何だろうか？対人援助か、それとも継承の受け手としてのものか。生徒達の学びの楽しさの源泉もこの辺りにあるような気がしてならない。現地の人たちからの「言葉」から生まれた疑問やまだまだ分からないということが継続して受講する原動力になっていることは間違いない。

3年目となる今年は、20名の受講者のうち継続して受講した生徒が5人、うち2人は高校1年生から毎年受講してきた生徒である。(昨年度は継続受講した生徒は21名中4名)彼らが学びを継続したいということは興味関心が1年だけで終わるものではなくて、現地に足を運ぶことから生まれる興味関心もあるということだと思う。

社会構造や基礎となる知識がなければ、目の前の人の語る「言葉」の意味の理解に近づくことはできない。だからこそ事前学習や事後学習では基本的な知識や社会構造などの学びを大切にしたい。しかし一方でこの「東北と復興」を通して生徒達の中に身につけて欲しいという教員としての願いとしての対人援助学、対人援助スキルとは何なのか。自然発生的に生徒達の中に生まれる対人援助学、対人援助スキルはあるのか。今年もその意味を探っていきたい。